

第5回8020 童話賞

一般の部 「最優秀賞」 作品

「むしバイキンなんてこわくない」

ウッシッシッシッ ウッシッシッ

はたらけ はたらけ

おいしいごちそう まってるぞ

ウッシッシッシッ ウッシッシッ

ごちそうだ ごちそうだ

ここは、むし歯のバイキンたちが住む、むしバイキン城<sup>ウキ</sup>。お城の中の工場では、たくさんのむしバイキンたちが、いそがしそうに、せかせかとはたらいています。歯をほるスロップや、やりをやすりなどいろいろなバイキン。歯をとかしてしまうあまくいみつを、ぐつぐつとにているバイキン。みんなおいしいごちそうにありつこうと、いっしょうけんめいにはたらいています。

そこへ突然、工場長が大きな声をあげました。

「みなもの しずまれ しずまれー」

むしばキング様のおでましなるぞー

えーい すがたかい。 ひかえおろー」

工場の最上階のステージに、まっくらなマントをはおり、ピカピカ光る金色のかんむりをつけたむしばキングが、ゆっくりと、のっしりとあらわれました。むしバイキンたちは、

「むしばキングさまだ」

「むしばキングさまだぞ」

「ひかえろ ひかえろ」

と口々に言っ、その場にひざまづき、頭をさげました。ステージの上に立ったむしばキングは、マントをはおった両うでを大きくひろげました。まるでまっくらなこうもりのようです。

「みなもの、面<sup>おもて</sup>をあげーっ」

むしばキングが言うと、むしバイキンたちは、「ハハッー」

と、いっせいに顔をあげ、むしばキングを見上げました。

「いよいよ今夜決行する。標的は、三丁目のさとなるものぞ。忍キン、調べはついておるのだな。」

※忍キンとは、人間界という忍者のことである※

忍キンは、ササッーとどこからともなく姿をみせ、むしばキングの前に小走りで近づき、ひざまづいて、身をかがめました。

「おそれながら申しあげます。今夜さとなるもの、寝る前にキャンディをなめ、ポテトチップスを食べ、歯をみがかずに寝てしまいました。口の中は宝の山でございます。」

むしばキングはウンウンとうなずき、忍キンに言いました。

「よーし。よくぞ調べたな。そのほうに、ほうびをつかわすぞ。」

「ハハッ ありがたきしあわせ。」

忍キンはそう言うと、また小走りにササッーとどこかへ消えていきました。

むしばキングが大声をはりあげます。

「みなもの、今夜12時決行だ。任務をおこたるでないぞ。」

「ハハッー」

むしバイキンたちは、いっせいに頭をさげました。

さてさて、さとるは、自分にまの手のびているとは夢にも思っていない。口をあけクーカ、クーカとのんきに小さな寝息をたてています。

ゴーン ゴーン

12時のかねとともに、さとるのベッドのまわりに、むしバイキンの大軍があらわれました。さとるのおでこに乗ったむしばキングが、む

しバイキンたちに声をかけます。

「準備はいいかーっ。」

「オーっ。」

むしバイキンたちは、それぞれ手にもったス  
コップや、やりを高くふりあげます。

「エイエイオー エイエイオー。」

むしばキングがさげびました。

「みなもの かかれー。」

むしバイキンたちは、やあやあ わあわあ、  
さとの口のの中にはいました。はிட்டたと  
たん、むしバイキンたちのかんせいかわきあ  
がります。みんなうれしくて、はしゃぎま  
くっています。

「やー こんな宝の山は久しぶりだぜ。」

「がっぼり いただこうぜ。」

ウッシッシッシッ ウッシッシッ

はたらけ はたらけ ごちそうだ

こんなごちそう みたことない

ウッシッシッシッ ウッシッシッ

スコップでほって、やりでつついて、歯にこ  
びりついてなかなかとれないキャンディは、  
歯をとかしてしまうあまーいみつを、たっふ  
りたらして、とけたところで、びんにつめて。  
はい、ひとびん。はい、ふたびん。あっとい  
うまに10びんできた。

ウッヒャッヒャッヒャッ ウッヒャッヒャ

ッ

「ごちそうだ お宝だ

やがて宝を全てとりつくすと、むしばキング  
が大声で言いました。

「みななもの、宝をかつげー。城へ帰るぞー。」

よく朝、さとの歯がいたくて目が覚めま  
した。

「いたい、いたい、いたいよー

お母さん、歯がいたいよー。」

さとの歯、歯がいたくて朝ごはんも食べられ  
ません。どうして歯がいたくなったのか、さ  
とのにはわかっていました。お母さんの言う  
ことをきかないで、歯をみがかなかったから

です。

「歯をみがきなさい。虫歯になるわよ。」

と、いつも言われるたびに、

「虫歯なんかこわくないもん。」

が、さとの口ぐせでした。でも今は、いた  
くていたくて、そんなこと言っていられませ  
ん。

「今日、歯医者さんに行こうね。」

とお母さんが言いました。さとの歯は泣きなが  
ら、うなずくのがせいっぱいでした。

歯医者さんで治療してもらったさとの歯は、  
数日もすると、いたみがとれて、元気になり  
ました。

「虫歯があんなにいたいなんて知らなかった。  
もう虫歯なんかこわくないなんて、ぜったい  
言わないぞ。」

そう心にちかかったさとの歯は、毎日、食べたあ  
とにフッ素いりのはみがきをつかって、歯  
みがきをするようになりました。寝る前には、  
デンタルフロスで最後の仕上げをします。  
でも、さとの歯はおかしが大好き。おかしのない  
毎日なんて考えられません。そこで、お母  
さんと相談して、ガムを食べたいときには、  
キシリトールいりのガムにしました。おかし  
を食べたあとには、はみがきシユッシユッ。  
そしてお母さんの、みがきのこしチエック。  
こうして毎日やっているうちに、さとの歯は、  
歯みがきしないでは口の中がきもちわるくて、  
寝られないようになってきました。

さーて。さとの歯が改心したことはつゆ知ら  
ず……むしバイキンのお城では。

むしバイキンたちは、働きもせず、宝の山に  
よいしれておりました。毎日がパーティーで  
す。忍キンまで、忍びの任務をおこたり、あ  
そびほうけています。

しかし、ひと月もすると、ごちそうはすっ  
かりなくなってしまうました。ある時、むし

はキングが忍キンを呼びよせました。

「さとるなるもの、その後の調べはどうなっておるのだ。」

「ハハッ あいかわらず、歯もみがかずに寝ている様子にございます。」

忍キンは、あそびほうけていて、仕事なんてしていません。さとるの最近のことなんて、知っているはずありません。むしばキングにおこられるのがこわくてウソをついたのです。

「よし、みなもの、今夜12時決行だ。ぬかるでないぞ。」

「オーッ」とむしバイキンたちは、いせいよく言ったものの、ずっと働いていませんでしたから、スコップもやりもさびついてボロボロ。みつをにるおなべのそこには穴があいています。それでもまた、お宝にありつこうと、ボロボロの道具を手に、さとるのベッドのまわりにあつまりました。さとるはきもちよさそうに口をあけ、クーカ、クーカと寝息をたてています。

「みなもの かかれー。」

むしばキングが大声をはりあげました。むしバイキンたちは、いっせいにさとるの口の中にはいりました。すると、とたんに悲鳴をあげ、青い顔をして口の中からとびだしてきました。

「なんだ なんだー。このもうれつ 強じやうれつ

むしバイキンたいじパワーはなんだー。」

さとるの口の中は、歯と歯の間から、ピカーッとまぶしい光線がはなたれ、フッ素のバリアでおおわれています。毎日の歯みがきと、デンタルフロスの効果があらわれたのです。むしバイキンたちは、ヨタヨタとびびりながら、退散していきました。

よく朝、目が覚めたさとるは、お母さんに言いました。

「ほくね、むしバイキンたちをやっつけた夢

を見たよ。もうむしバイキンなんてこわくないよ。」

「そう、よかったわね。むしバイキンにねらわれないように、これからも歯みがきがんばろうね。それにね、さとる。白い歯ってかっこいいよ。」

お母さんは、さとるの顔をなでながら、やさしく言いました。さとるは「うん。」と大きくうなずきました。

にげかえったむしバイキンたちがその後どうなったかって？

あのあとね。むしばキングのいかりにふれ、忍キンは、修行の旅にだされ、むしバイキンたちは、昼も夜もなく、せいをだして働いているそうですよ。次のお宝にありつこうとみんな必至なんです。

そうそう。むしバイキンたちの次の標的は、歯みがきがきらいな……その君かもよ。

おしまい